



小秋晴の日(下)

永代美知代

「可いから私!」

よしゑはついと立ち上りました

「私が、こんなに、こんなに東京へ

行ききたがつてるのに、おつかさ

んと云つたら、些少とも人の氣を

察して下さらないんだもの……そ

してあんなに、一人でづんづんお

家へ歸つていづつしやるんだもの

……私もういつそ行つちまふから

可い!」よしゑは一途に斯う思ひ入

つてしまひました。手早く春の草

薺を外して其處に置きました。姉

様冠りの手拭をとつて、朝露にし

とつた脛を拭き、からげた裾をお

ろして、いざ街道へ出ようとす

と、今朝草の序につんで置

いた濃紫の桔梗が目についた。

「おゝ、よしゑはその一枝を草薺

から抜き取つて、頭髮にさしまし

するかのやうに、よしゑには思は

れました。暫らくは夢中で駆けて

ゐましたが、よしゑは追手に追は

れるやうな氣持がしてふと舊道ら

しい小徑に入つて行きました。今

迄とは違つて、道しるべの轍の跡

もありません、よしゑは小徑のわ

かれ路に來る度、思ひ迷はずには

居られませんでした。

其内にも日は高くなるのはつて、か

ち一つ持たないよしゑの脳天から

は云へ、秋晴の日光の、流石に堪

え難く暑くなるしいふとまた小徑

の岐路に來ました右か、左か、よ

しゑは立止つて考へました。

「道しるべのお地藏様位ありさう

なものなのに……」焦々した氣持

ちになつて、四周を見廻しました

けれど、それらしいものゝ形もあ

りません。と突然に聲をかけられ

ました。

「姉さん、何處さ行く?」

よしゑがゴッとして振向くと

家からの追手ではなく、眼付の姿

い、さもゝ恐らしげな若者でし

た。

「町さ行くなら、一緒に連れてつ

てやるべし!」

よしゑは返事をしませんでした。

「何もそんなに恐がる事ねえだ、

のう姉さん、町さ行くなら私と一

緒に行かうでねえか?」

「いえ、私は町へ行くんぢやあ

りません。よしゑはやつと斯う斷

りました。何處でも可いお前の行

く處まで一緒に行ってやるべし!」

若者はたたく笑ひながら、よし

ゑの傍へ寄らうとしました。